

現今富者に對する反感日に旺んならんとする傾向あるは洵に憂ふ可き現象にして、其極端に走らんか階級鬭争となり國家の衰退となり、果ては國體をまで破壊せしむる悞れなきを保せず、斯は之れ物質偏重の餘弊にして世の多くの富者が大我に生くる大いなる幸福を求めずして、小我に生くる小幸福をのみ享有せしが故なり、換言すれば、衆と共に樂しむ事は、人生に於ける最善最大の幸福なるを思はずして、徒らに獨り樂しむ事にのみ趨りしに由る。蓋し國家社會に奉仕するは、富者にのみ求むべきに非らず、全國民の責任なる事は贅言を要せずと雖も、無産者は勞力を以て奉仕する以外、之を求むるも餘裕なきにより、餘裕綽々たる富者に求むる所以なり。

吾人は此見地に基き、富者各自應分の資力を提供して社會事業に貢獻するは、即ち君國に忠なると共に自己に忠なる所以なりと思惟するものにして、徒らに謂れなき犠牲のみを強要せし、本能無視の舊道德を強ゆるものに非らざるなり。

## 趣 旨

東京市府に於ける社會事業の大勢を観るに、其尤も振はざるは細民合宿所事業にして、各慈善團體の經營に係る無料及低廉宿泊所十ヶ所の收容力は、僅々八百五十名に過ぎず、殘餘約二萬九千名の無宿者は、平均四十錢の宿泊料を支拂ひて、營利的木賃宿に宿泊しつゝあり、然も彼等細民の日收は、平均一圓五十錢にして此中より日々四十錢の宿泊料を支拂ふは、彼等として非常なる苦痛ならずんばあらず。

故に彼等をして生活を安易ならしむ可く、低廉宿泊所を増設するは、社會事業中の急務たるを失はず、然も既設の合宿所中には彼等が何より慰安とする浴室すら設けざるあり、其他修養設備なきもの、娛樂設備なきもの、不潔極まるもの、禁煙を強ふるもの、木枕の不快を與へて顧みざるもの、掛布團のみを給して敷布團を給せざるもの、恩惠的態度を以てして屈辱を感ぜしむるもの、役所氣分のため一種の壓迫を感ぜしむるものあり、如斯は可憐なる細民を待つに、餘りに思ひ遣りなき態度にして、折角の慈善事業も誠に心細き感なくんばあらず、茲に於てか吾人は、理想的宿泊所の必要を痛感し、之が實現を期す可く、社會事業の先達たる澁澤子爵、市府當局者、又は其他先輩の教示と贊助とを仰ぎ左の方針により勞働ホテルを創始せんとするにあり。

希くば世の仁人富豪諸子、幸に吾人の趣旨を賛せられ國家社會の爲め、可憐なる細民のため、且つ、は諸子御自身のため、大我世界の人となりて、奮て御援助あらん事を